

小田原史談

第60号

談会1
史6
原内
小市文
原城化
所原土
行田郷

妙安寺近衛家三墳について

中野 敬次郎



北条氏政の夫人は、氏政の父氏康が天文二十三年（一五五四）の春、武田信玄今川義元と駿河の善徳寺で会合したいわゆる「善徳寺会盟」の約束に基いて、同年の暮に小田原に嫁してきた武田信玄の長女の黄梅院であることは知名のことで私も二三回書いていたものもある、この黄梅院は氏直を初め四男二女を生んだ後に永禄十二年（一五六九）六月十七日に二十七歳の若さで歿しているのだし、その時氏政も三十二歳の壮年であるのだから後室を迎えなかつた筈はない。そこでその後室は誰であるかとい

うことだが、資料が殆んどないので明かでない。ただもと北条氏の氏寺であった寺町の信心庵の過去帳に「鳳翔院殿奇雲宗祥大禪定尼。氏政公後御前。天正十八年六月二十二日。」という記録があつて、同帳に記されたその中の北条氏関係の鬼簿が大体誤りのないところからすると、この記事も信用できるものと思

われるので、鳳翔院が氏政の後室であつて、天正十八年（一五九〇）の小田原戦役の最中で、戦斗の大勢もほぼ定つた六月二十二日に城中で歿していることがわかるが、その死は果して病死であつたのか自殺であつたのか、いろいろ推定される問題の女性である。しかし、ここではそういう議論をしようとは思はないがた

だ、この夫人の素性だけではないかと思ふのだがこれも明確でない。ところが鳳翔院は京都の近衛閑白家の娘であつたという説が昔からある。

その説はもと天保十三年（一八四二）にできた「新編相模風土記」の記事から出ているようで、同書の足柄下郡板橋村の妙安寺の条に、同寺の境内に「近衛家の墓」というものが三基あつて、後法興院殿（謚号）こと近衛閑白政家。後法成寺殿こと近衛閑白尚道。勝法院殿こと閑白尚道の夫人の三人の墓であることが記されてあり、更に寺伝によつて、勝光院は北条氏政夫人の母で、晩年に小田原に下向して住んで歿したので氏政夫人が父母と祖父を遙拜のためにこの三基の墓を

作つたのであると言われていると記しているのであるつまりこの記事から推定すると氏政後室の鳳翔院は閑白尚通の娘ということになる訳なので、私は大いに興味をもち、小田原に来住の早々の頃板橋に妙安寺を訪ねていつたのである。ところが板橋に妙安寺という寺は無かつた。

人々に尋ねて見ると「その寺はずつと昔廃寺になつてしまつたとか、他に移転したということである。なんでも大磯か二宮かの方にその後寺があるということだ」という答えで、それ以上のことばは教えてくれる人がなかつた。廃寺の跡だといふところには近衛家の三墳もどう探しても見当らなかつた。寂しい気持で家に帰つたが、事にまぎれて、その後これを追究することもせず永い間いたが、或る年私は某所で講演をたのまれて、談たまたまこの問題に触れ、近衛家三墳がいつの間にか小田原から姿を消してしまつたのは残念であるどころか運び去られたものだらうか、毀されてしまつたものだらうかといふ話をしている、聴衆の中に原

善藏という人がいて「先生。その妙安寺という寺は現在二宮町にある。そして近衛家の三基の墓もちゃんと境内にある。私はその寺の信者だから間違いない。御案内いたしましう。」と言つて出てこられたのは驚いたのである。その後間もなく私は二宮町を訪れたが、二宮駅から国道に出で、少しく西に寄つたところの海岸寄り、二宮町二宮九七番地に立派な妙安寺という寺があり、境内に問題の近衛家三墳がちゃんと存在しているのにはまたびつくりした。

元来この妙安寺という寺は寺伝によると、日蓮宗で京都本國寺の末寺であるが日蓮上人の中老日源によつて鎌倉時代に開基されたのであるが、その後衰微していたのを、小田原北条氏の頃、妙安尼という女性によつて中興されたので、この人の院号をとり勝山妙安寺と称するようになったと伝えている。

ところが明治維新の廃仏毀釈の浪潮にあつて寺が廃寺同様となつた。

当時二宮町の素封家に神保半輔という人があり、父の弥三郎が眼病を煩ひ、小田原板橋にある妙安寺に祈願して平癒した因縁があつて、熱心な日蓮上人の信仰家で、当時二宮には日蓮宗の寺が無かつたので、父の信仰した妙安寺が廃寺同様になつていたので、これを二宮に移して新寺を建立しようという大願を起した。

しかし、その頃は新寺の建立は官庁がなかなか許さなかつたが、半輔は小田原地方で有力であつた本久寺の自然和尚の援助をうけて東奔西走、幾多の支障を克服して官の許可を得て、巨額な資力と努力を投じて遂に妙安寺の小田原より二宮への移転に成功したのである。

かくて半輔は二宮町袖ヶ浜の土地一千余坪を敷地として寄附し、明治十九年九月新寺を建立した。

さて、寺伝によると、前記したように、寺の中興の勝光院妙安寺は近衛閑白尚通の夫人であつて、北条氏政後室の母であつたから、晩年小田原に下向してこの地で歿したので、氏政後室が母の追福のために建立したのが妙安寺であると寺伝に基き、近衛家三墳

もこの時大切に二宮に移され、新寺の境内に建てられたものが、現存しているのである。

三基の墓石はいづれも自然石に法号を刻したもので

その一は「南無妙法蓮華經。後法興院殿准三宮禪閣尊儀。永正二年六月十九日」と刻してあり、高さ九〇センチ、横三五センチである。

その二は「妙法。後法成寺殿准三宮尊儀。天文十三年八月廿六日」と刻して高さ一〇五センチ、幅五二センチあり。

八王子紀行文

加藤誠夫

先般八王子市及び高幡、由井領等を調査に赴いた。先づ八王子市郷土資料館から高幡不動尊に参拝、山上の高幡城跡を見学下山、不動堂(国文)鐘樓堂(江戸前期)八幡宮、大師堂、芭蕉句碑(名月にふもとの霧や田のくもり)上杉憲顕の墓、源義家頼義の旗かけの松、近藤勇、土方歳三兩雄の碑、お鼻井戸、反立門(重文)他弁天堂等、更に百草園に行く、行程で約十

その三は「妙法。当寺大檀那勝法院殿妙安尊尼。天文廿三年七月廿四日。近衛殿御前様也」と刻し、高さ一一〇センチ、幅六七センチある。近衛家の系譜を調べると近衛関白政家は後法興院と号し、長享二年太政大臣准三后にのぼり、永正二年六月十九日、六十歳で歿してあり、その子関白尚通は、法成寺と号して、永正十六年准三后にのぼり、天文十三年八月廿六日七十三歳で歿しているのであるから、この三基は政家、尚通及び

尚通夫人の真墓石でないとしても三人の遙拝墓石であることを確かである。私は北条氏政後室が近衛家の出身で、関白尚通の娘であるという証拠を挙げているのではない。氏政後室の素性はまだまだはつきりしないのである。ただ、北条氏滅亡哀史の中の悲劇の女性を代表する人物であるだけに、この女性にまつわる伝説の近衛家三墳に深い興味を持っている。そして三墳の移転の次第を述べた大方の参考にしたのである。

待には主人と女二名で茶菓を販売、特に名物「しよしが入り甘酒」一杯五〇円にて体温まる、又名産品として梅漬も売る。百草園を出て由木領田村安栖の屋敷跡を見学、この地方の人々は方言として多摩を「タマン」と発音したのには一寸とまどえり、昔は上田村といひ、今はなき万願寺の跡地に田村安齊は新義真言宗積智院派中本寺、安養寺を再建すと、今

の安養寺は田村安栖死後その宅地に再建し当時の別宅を移築したとぞ、堂は九間に七間にして、向って右に古風なる草葺の大ききかなる庫裡を建て居居せり、墓地は当寺の世代の僧の墓を巡って、土方、斎藤他の嘉石林立せり、この周囲は全て土塁を巡らせ深い堀を巡らせて、土人は野火止めの沼と呼びいたり、この

国学者歌人吉岡信之

清水吉郎

地は昔武蔵七党と称せし大豪族、西党と呼ぶ村落なり村内の生沼忠作、今は清吉?と云う人の家には田村城の古図面を所蔵すると云。大きかった万願寺は中古瓦壊した時、今の高幡不動堂前に移築したのが当寺の楼門であると住職が云って、今の安養寺は三ツ柏の紋所を使用しているが、田村氏は鳥の紋所を使用している、万願寺は滝山の城から見て大手口に当るので今土人の口伝に「大手は日野の万願寺」と云っているそうだ、今でも田村氏の当主は大変な豪族で土地の広さは日野の村から新宿まで亘って自分の土地であるから本人が納税額は定めている、田村氏によって五〇%位と云えばそれが決定額になるとのことであった。

幕末の国学者で歌人である吉岡信之の歌集の見当らざるを惜しみ、その散逸せる和歌の数々を短尺、色紙扇面、書寄せ等、諸方面より蒐集して刊行一書と為すべく江湖に求むるものである。吉岡信之は文化十年十一月小田原藩に生れ、文政、天保、嘉永、安政、元治、慶応、明治と八歴代の慌しき変遷のあと明治七年六月二日六十二歳にて歿せられた、その間当初儀太夫と称せられ後府生と改められた世々藩侯に仕へ歳十七歳にして既に藩校集成館の小幹事となり、教鞭を執り、のち準小参事の官に進み三百四十石を受け、明治五年薩藩置県に際し職を辞して以来かねて江戸の歌人千葉葛村秀子、石井滝子、等が見当たれり吉岡信之の著「仮名考」には(呉竹の世の移りゆくまにまにに始まり、人々己が上にかれる、よび名のみ、わきて分かれる、あらざるべし、吾皇國にふるく名といふものなり、謡曲の景清の名乗り、枕の草子、源氏物語り、榮花物語り、鷹の一字二字考、苗字の事大夫の名乗りの事、大夫判官、藏人大夫、衛門大夫、五位の叙より大、太の稱呼)名のりの種々相詳述せられあり、されど此の仮名考には和歌は一首もなく、

他に和歌集が見当らず、現在散在せるものを採求し、とり纏めて吉岡信之の歌書となし、吉岡家の親戚に川村家と有浦家と小田原に現存せり、有浦家は信之の弟章が有浦氏へ婿養子となり、河村家は信之の娘千重が河村政一に嫁し、浩氏扇面一枚なり。

和算の先生

神保 栄

江戸幕末の頃の算学の大名家内田先生が曾我中村出身であった事を知って居る人は現今でわ如何なものでしうか。

この話は三年以前に埼玉県加須の不動ヶ岡に残る不動堂に、相州曾我中村内田惣五郎門人荒居新右三門外四十数名の連名を以て奉納した、算学の保存されて居る貴重な発見を埼玉県算学研究会の方々の為になされ、神奈川県教育委員会へ先生出身の調査の依頼があり、県立小田原高女の天野先生が算学研究に熱心な方なので調査を依頼されたといふ事でした。

現在は曾我中村と言ふても其場所を知る事も見当がつかぬのでしう。

達藏、河村勝氏と今に続けり。信之の弟子として現在知られる家は福住、小西、清水は僅かに其短尺を所持し、現在図書館に一枚、山本方に三枚、河村方に色紙一枚、小田原百年史に三首、伊東浩氏扇面一枚なり。

市の支所を通じて私に問合せられたのでした、私は少年の頃算盤の友から教へられた言葉に、祖父が申した「昔算盤で・蔵の鏡前を開けた先生が居られたと話した若者は中井の岩倉生れであった事を思い出した、中井は曾我山の裏側であり曾我、の領有地であったと伝えられている、然し今は中井と称しているが明治初年に中井と井の口と合併して中井と成った町である。

まづ岩倉から調査したら案内早く判明すると思ふて天野先生に電話した、そして私の友の生家や寺等を尋ねれば目指す内田先生の家は中井に内田姓の少ないので手はずを致しました。この電話で天野先生は早速と

車で岩倉へ行かれたのです道順で寺へ立寄って話したところ幸運にも目指す内田家の祖母様が居合されて、私の家かも知れないと申され養蚕を営みし頃使用せし二階の隅に埃にまみれた板がありました、家に伝へられて居る話に曾我谷津の名主の家に婿に行かれたが江戸へ行き武士に成ると実子二人を連れて出て行かれたと語られ案内されて二階を探すと詰の如く板があり版木と思われたので先生は数枚の板を借用して帰り良く洗ったら版木であったので内田先生の生家は松本である事が実証されました。

みで私が生れた部落でも直に判明出来ませんでした、曾我谷津は昔作らの住民のみでしたので年代を考へて日当をつけ名主であった家を見付けましたのでそれとなく話して見ましたら松本で話された如くでしたが他へ洩れる事は申訳ないので天野先生と私のみ他へ話さないと言ふ事に致したいと思ひます。

この家の名も天野先生に直ちに御知らせを申上げました。尚私が岩倉の友より聞いたのは今より六十年近く前の事でした。天野先生が県を通じて埼玉の方へ報告された事も聞かせて貰ひましてお役にたった事を喜びに思います。

昭和十六年七月初旬から関東地方一帯に大暴風が襲来、東海道線が各所で不通になり上下各列車の遅延が甚しく、列車の運行状態が極めて悪く、小田原駅附近もまた、不安になって参りましたので松本駅長は輸送の確保を図るため、単身で各所を巡察指揮督励に當っておりましたが、たまたま

告しようとして駅への帰途、東京起点八三軒三五〇米附近の大雄山鉄道線路上に差しかかった時突風にあふられて頭部及胸部に重傷を負い、その場にこん倒しておたのであります。

その後約一時間後に、現場附近を巡回しておつた、小田原線路分区分長が之を発見して直に小林病院に送り手当を加えましたが、翌々日の二十四日十七時に四十九才を一期として遂に永眠されました。

以上によって、国鉄全職た。

小林泰助氏喜寿の祝

三橋 正四郎

編集部長になった小林商事社長小林泰助氏と私は大変ウマが合つて数年前(新日本協議会理事当時)から親しくなり、時折り小林さんのホームバーで飲を尽し大型ステレオで森繁久弥、露しよう。

○喜を分けて 酌まはば 初春の酒 生きて見て また めぐり来し春の日に 白梅匂う喜寿の盃 (小林泰助詠)

松本宇一 駅長の殉難

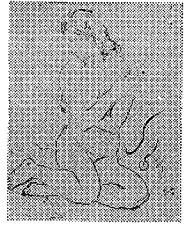
額田 喜代春

昭和十六年七月初旬から関東地方一帯に大暴風が襲来、東海道線が各所で不通になり上下各列車の遅延が甚しく、列車の運行状態が極めて悪く、小田原駅附近もまた、不安になって参りましたので松本駅長は輸送の確保を図るため、単身で各所を巡察指揮督励に當っておりましたが、たまたま

告しようとして駅への帰途、東京起点八三軒三五〇米附近の大雄山鉄道線路上に差しかかった時突風にあふられて頭部及胸部に重傷を負い、その場にこん倒しておたのであります。

文

芸



(田辺至画伯画)

吉岡信之の歌

清水専吉郎

重陽宴

ぐみかくるとばりのもとにふるき世の
ためしときくのごさけくむなり
二かたの大人のひと給ふよろこばしさに

言の葉のはなを宿とし鶯の
とめて来んとはおもひかけきや

六月立秋

みな月の残る日数も二つ三つ

桐の葉おちぬ秋や立つらん

秋雨新声

夕庭にははきはらはや秋の雨の

はれてもあすの空はたのめぬ

終夜甌月

いくかげりとなりの寺をうたひけん

にしになるまで月にあそびて

夏の日箱根にゆあみして

湯あがりあせのひぬまのかいまくら

なつさえ夢といつなりにけん

梅問 露

技うつりするか鶯さく梅の

梢さためぬ声の聞ゆる

尋 山花

尋ぬればそれかあらぬか白雲の

たとりてまよふ山桜かな

深夜水音

山水の音も枕にさゆるなり

まだき時雨の降らんとすらん

雪中鐘

小泊世やはつせの山は埋もれて

ゆき園にある入あひのかぬ

嫁と姑さん

高田福寿会―振り付 川口喜美代

ハアー うちのお嫁さんネ きりよが良くてサテ

気だてやさしく親おもい

嫁にきてからお袋さんと いつも茶の間に

いつも茶の間に花さかすソレ

(嫁がソッコラサと音頭とりや孫と

姑がソッレソッレおどりだす

ハアー うちのお姑ネやぶから棒にサテ

物をいうよな人じやない

古い昔をたんすにしまい嫁といっしょに

嫁といっしょに電気釜ソレ

ハアー うちの嫁さんネ姑をたてりやサテ

姑ほんとに嫁じまん

家はあんしん関白さんもそとで仕事の

そとで仕事の精をだすソレ

ほんおどりうた (江戸時代)

○千代の小泉さん ホーキはいらぬ 座敷は袖ではく

庭裾ではく おもては若衆の声ではく

○千代の若衆はどぶ田の目高。千田千田にのどが干る

千代と高田は米どころ。娘やりたや婿ほしい

(小田原北条戦の時、男は皆かりだされたため

女ばかりで田植をしたという、それとどぶ田な

るがために田をうなわないで田植ができたので

しょう。内田武雄)

片浦支部臨時総会

支部長松本孝作)は七月八

熱心な審議で盛況 日、片浦公民館に於て臨時

小田原史談会片浦支部(総会を開催、「片浦地区史

蹟園の掲載」「鎌倉方面史

蹟めぐり」「幕前祭(石橋

山合戦関係者)」「根府川

鹿島踊披露の件」などを審

に終了した。

「日本戦史小田原役」

小田原史談会限定出版

小田原史談会は郷土の歴

史を知ることを目的に参謀

本部編集「日本戦史小田原

役」を編集部研究用として

製作出版致しました、限定

版に付き部数に限りがあり

ますから会員はお早くお申

込下さい。尚会員外でもご

希望の方にはお頒け致しま

す、頒価会員一五〇〇円、

他は二〇〇〇円。

内容概略、小田原役起因

及戦役前の形勢、豊臣と北

条との関係、両軍の作戦計

画、箱根山附近の戦闘、小

田原城の攻囲、諸城の攻守

北条の滅亡(八十五頁)小

田原役文書(五十四頁)小

田原役補伝―豊臣・北条の

交戦から早雲の勃興、氏綱

の功業、氏康の大成、氏政

の庸愚、徳川家康・氏政父

子と会見、以下略江戸城繁

華まで堂々二百九十九頁計三

百五十八頁、他「小田原戦

図」「忍城戦図」「西軍各

部隊区分表」(お申込は小

田原市城内六一郷土文化

議した後、会長中野敬次郎

先生の「石橋山合戦」の講

演があり小宴に移り盛會裡

に終了した。

会員の近況

(会員の近況)欄を新設

致しました、皆さんの身近

な問題、情況その他なんて

も結構ですからお葉書にて

もどしどしお寄せ下さい。

▽小林泰助氏はご子息泰二

氏とともに、ソ連見学のた

め七月二十日羽田空港を出

発、三十一日帰国の予定。

「東京夏季講座」

八月七日午後一時より

▽小田原市久野の東泉院(

会員岸達志郎)では八月七

日(土)一時半より五時ま

で本堂に於て(東京夏季講

座)を開催▽北条早雲をさ

ぐる小田原史談会専門委

員立木望隆先生▽禅とはな

にか駒沢大学講師服部松

齊先生の講話がある、一般

の来聴は自由。